

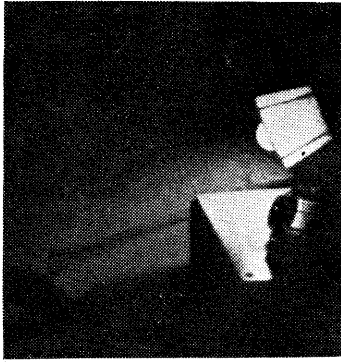
ヨーロッパの旅

—— 郷 愁 ——

平 井 信 義

異国での生活には、しばしば強い郷愁が襲ってくる。郷愁——このことばは、私ども日本人にとっては、最も適切なところの表現となる。ホームシック Home sick でもびたつとしない。ドイツ語のハイムヴェ Heimwehの方がまだ私のころにしみ入るものがある

ベッドのわきの小さなスタンドの影の中で。



が、やはり使い慣れた郷愁ということばが最も私のころの叫びとなる。

私が最初に強い郷愁を感じたのは、下宿の一室であった。すでにドイツでの下宿生活にも慣れて、私に部屋を貸してくれているベッ

カーおばさんとも、冗談をきく間柄になっていた。非常によい年寄りで、教養もあり、親切でもあった。親切といっても、日本人の親切とはちがうが、親しみ易い人であった。しかし、ベッカーさんのことで、私には強い郷愁が襲ってきたのである。

その日、私は友人から夜の食事に招かれていた。ドイツ人はズボンの折り目が正しくついていることを一種の礼儀と心得ている。それを普段は気にしない私であったが、人に招かれたときにはやはり気になってくる。私は、たるんだズボンにアイロンをかけようと思った。それは日曜日の、午睡からさめた頃であった。同じように戸口からにこにこした顔で出て来たベッカーさんに「今夜、客によばれているので、アイロンを貸して下さいませんか」と私はきいた。私は、親切なベッカーさんから、「さあ、どうぞお使い下さい」という答えを期待していたし、今にも目の前にアイロンを差し出されると思っていた。ところが、その期待はそわかれた。ベッカーさ

んは、ちょっと考えこむように答えをしぶっていたが、

「一ベニツヒもらいましょうか」と言った。一ベニツヒといえば、一円にもならない金である。そうした金を、アイロンの使用料としてねらうという量見なのだろうか——私の胸にはグツとつかえるものがあつた。

「一ベニツヒ？」ときき返したが、私は、むやみに腹が立つてくる自分を感じた。何と言おうかとためらつた。怒りを押さえて借りなければならぬと思つた。しかし、えい糞ッ！ と怒りもこみ上げてくる。また、こんな時にはどのように言つたらいいのだろうかとも考える。しかし、

「ナイン、ダンケ・シェーン（いいえ、いりません。使う必要がないのです）」ということばが口からほとばしり出てしまつた。そして、顔が赤くなってくるのを感じた。

「いりませんか？」とベッカーさんは、さも怪訝だという顔付をして、私の目をじつと見た。そして、さも理解出来ないことだというように、ちよつと肩をすくめた。

私は逆上した。えい、糞婆奴。アイロン使用量なんか取りやがって！ ドイツ人のけちん坊根性には、あいた口がふさがらねえや——とどなりたかつた。しかし、私にはそんな度胸がない。ドイツ語で上手に表現することも出来ない。

踵を返して、私は自分の部屋に戻つた。それをベッカーさんがどう感ずるかを考える暇がなかつた。ドアが、私の後でボタンとしまる音がすると同時に、私はベッドの上にガバつとうつつ伏せた。

「根畜生め！」

羽蒲団をかかえるようにして、どの位の時間を過ごしたであろうか。白い蒲団カバーに、顔の當つた部分が窪み、その中に二点、湿つた部分があるのを認めた。何て、だらしない人間なのであろうか。アイロンのことでなんか怒りを発して！ 自嘲が笑いとなつて、私の顔に浮かんでくる。

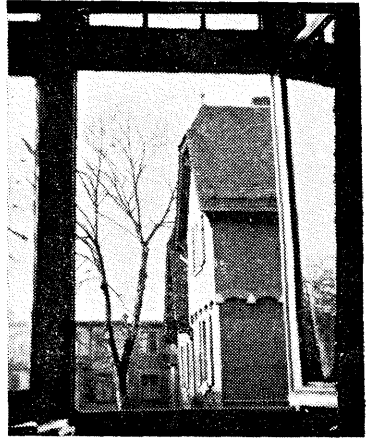
私は、一度起き上がった。しかし、再び仰向けにベッドの上に倒れた。白い天井。そこには蠅が三匹、頭を向け合つて、じつとまわっている。外は風があるのか、天井に映る影が、ゆれているように見える。

「ああ、帰りたい。日本には、私の気持を受けとめてくれる者が待っている。ああ、帰りたい。帰りたい——」
う叫びが口をついて出てきた。しかし、それ



家族の写真はいつもベッドのわきの台の上に置かれていた。

冬枯れの窓外は淋しい。



は、ガランとした私の部屋、おそらく十二畳もあろう私の部屋の中に、虚ろに消えていくだけであつた。

そのあとの淋しさはまた格別である。今夜にも帰りたい、今すぐにも帰りたい、——しかし、なお半年以上の留学期間があつた。

私は目をつぶろうとしたが、つぶっていることが出来ない。目尻がチリチリとふるえ、再び見開いてしまった。これはいけない、ノイローゼになるぞ、——私は再び起き上がってスリッパを引っかけた。戸棚の前にいき、ビール壺を取り出そうと思つた。

戸棚の正面には、顔が一つ映る位の鏡がついていた。見るともななく映すと、顔が黒ずんでみえる。目が引つ込み、思いなしか、目の下にくまどりも出来、いかにも精氣のない顔をしている。よく見ると、目の光がにぶいし、髪の毛にも油がなくなつてきているようである。——こんな顔付をしていては、参つてしまう。何とかしなければいけない。私は、戸棚からビール壺を取り出し、机の上に音高くおいた。そして、栓の掛金をはずした。

しゅっ　ボン！　そして泡立ちの音がきこえ始めた。私は、大きなコップに、なみなみと注ぐと、泡は勢よくコップの縁から盛り上がり、幾筋かの流れとなつて、机の上に流れた。泡立ちが鎮まらないうちに、私はコップを取り上げて、泡の下から、ぐっとほろにがいを舌の先から、食道、そして胃の底にまで、味わたつた。一と息に飲み乾すと、もう一杯注ぎ入れ、もう一と息、飲み乾した。そして、ベッドの上に倒れるようにして寝た。

私は、アルコールに弱い。二杯のコップで間もなく朦朧としてきたにちがいない。目がざめた時には、すでにあたりが暗く、風の音が戸外にざわめいていた。私は大きなあくびをして、今夜はボッシュ君に招かれているのだと思ひ返した。それにしても、時計を見ると五時を過ぎていたから、こうして二時間も寝ていたのだ。そのきつかけは、そうだ、ベッカーさんにアイロンを借りることから始まつたことなのだ。

日本にいれば下宿をしても気持よく貸してもらふことが出来、今頃はしゃんとした折り目のズボンを手ハンガーにかけて、今夜の招待を期待しながら、本でも読んでいた頃であろう。それが、怒りとなり、郷愁となつたのだ。大学の頃、何回か下宿をした。その頃私によく世話をやいてくれたおぼさんの顔、顔。そうだ、石井権吉さんの妻君もよかつたし、進藤さんのおぼさんも、親身の及ばないほどであつたし、何て日本は人情の厚い国なんだろう。私は、人情というものをもう一度思い返す機会にふれた。

だが待てよ、——私は、むっくりと起き直つた。日本の人情とい

うが——権吉さんの妻君や進藤のおばさんに、アイロンを借りた時のことを思い出した。何枚もアイロンをかけるものが溜って、小一時間も使用したことがあった。その時、使用の時間が経過するに従って、おばさんが何かブツブツ不平を言っははいまいかという不安が湧いてきたのではなかったろうか。「貸したところが、いい気になって使っているじゃない」——そんな声が二階の部屋にまできえてきそうな気がしたのを——。もちろん、親切な二人はそんなことを思っていなかったかもしれない。しかし、日本にいる時、人からうけた親切には、何か後暗いものが漂っていた。

そこで、何か親切を受けた時には、それを、いつかは、何かの形で返さなければならぬという気がしてくる。親切にされた後は、旅先から何か送ったり、土産物を買って帰り、それで親切が帳消しになったように感じて、重荷をとくのである。親切のお返し——とは、変なものではないか。

あるいは、親切にした方でも、そのお返しを期待していることがしばしばある。あの人に親切にしてやったのに、何とも応答がないじゃないか——こうしたことをよく人からきいた。ますますお返しをしなければならぬ気持ちに駆り立てられるわけである。それが、盆暮のあの贈答や、頼みごとの際の贈物や、あるいはそうした類の交際になって現われ、いかにも多い状態であることに気づいた。ドイツでは、盆暮の贈答も、人を訪問する時の贈り物もない。クリスマスには贈物をするが、親しい間柄で、平生から本人の喜ぶものを研究して、贈る。したがって、袖の下もないし、贈られた側

でも、贈り主のいる前で聞いて、その好意を大仰に喜ぶのである。この時、私は一ベニツヒの意味を考えた。そうだ、二十分一ベニツヒときめれば、それで一時間になれば二ベニツヒ也を使用料として払えばよい。使用中の懸念もいらぬし、使用後のお返しをする必要もない。明かるい気持で、三ベニツヒと、四ベニツヒと、契約通りに使用した分を払っていけばよいのである。

これを、あるいはドライと言うかもしれない。しかし、日本人のウェットは果たして望ましいものであろうか。親切というものが、愛情に根ざしているものであれば、与えるだけのものであっていいはずだ。また、親切を受けた側も、感謝の意を口で現わすが、心に留めておくことでよいはずである。ところが、我が国の親切にはお返しがつきまわってくる。お返しがじゅうぶんでないかどうかの不安もある。お返しをしないと悪く思われはしないかという懸念もある。そうした不安や懸念のために、ずい分多くの時間と経費とをにかけているとすれば、何という無駄の多い国ではなから



ベッカーおばさん

うか。しかも、人情とか親切が、純粹に育っているのではないのである。

そうした人情を面倒に思い、今の若い人たちがドライになるのは、むしろ当然といえよう。親切をする方でも、返礼を期待させなければ、どのようなドライな人をも、悪くする必要がないのだ。その人が感謝をしようとすまいと、親切はあくまで与えるだけのものであるはずであり、それが親切というものなのだ。

私の気持はすっかり落ちついた。ズボンの折りが正しくつかないままでボッシュ君を訪問するとしても、この話をきり出して了解してもらうことが出来る。しかし、彼に日本の人情が理解できるだろうか。おそらく、我が国に見られるような人情というもののない国に育った人間には、なかなか理解出来ないことだろう。

一つの国もっている文化は、その国の人間の人格を作る上に重要な意味を持っている。心理的なやりとりの上でも、お互を理解する上においても……。そして、それは、幼い子どもの頃から養われ、そして人

格を抜き差ししないものとしてしまう。

「人情」というものも、その一つの例だと思われる。

古い人のいう「人情は、今の日本に失われてきているのは確かである。古い人が、それを惜しむ気持を、私どもの年令の人間は汲み取ることが出来るとはいえ、新らしいドライな人間関係にも魅力があり、若い人たちがドライであっても、それを責める気持にはなれない。そして、いつかまた、若い人たちはドライの中から、より新しい人間関係を作り上げてくれるだろう。

闇の中で、ベッドの上ですわったまま、私はすっかり自分の気持が落ちついているのを感じた。ボッシュ君訪問の時間までに、鬚を剃らなくてはならない。

再び鏡に向かった私の顔は、赤味が伴い、精気に溢れていた。

* * *

洋書紹介は頁数の都合により今月は休みます。

幼児の教育 第五十八巻 第十一号

十一月号 ◎ 定価五〇円

昭和三十四年十月二十五日印刷

昭和三十四年十一月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。